

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 田中祐理子

田中祐理子氏の博士号(学術)学位請求論文『「病原菌」の歴史—実在・表象・歴史性について』は、「病原菌」をめぐる思索と探究の歴史を、「病気の原因」となる「目に見えない存在」についての人間の様々な「想像力」の働き方を記録するものと、他方で、「病原菌」が細菌及び各種の微生物という、現実に存在する具体的なものであることを証明して一個の科学を成立させてゆくプロセスを描くものの、二つの対照的な歴史のせめぎ合いととらえ、それらが最終的には科学史的言説の新しいパラダイムとしての「細菌学」へと縊りあわされていく過程を多角的に記述した論文である。

本論文は、現代の科学的言説を縛っている「科学史」の一典型ともいうべき「細菌学の歴史」がともすれば、「病原菌の歴史」の黎明期である微生物の発見から細菌学が最終的に確立する19世紀末までのあいだに現れた、目に見えない、あるいは顕微鏡によってやっと見えるようになった微小生物についての「想像的表象」を、「客観的事物」に基づく実体的科学主義から批判・排斥しようとすることに異を唱えるものである。そのために、本論文は、あくまでも実在性を重視する「科学史的言説」と、微妙な揺らぎにみちた「想像的表象作用」とのあいだでのダイナミックなせめぎあいを歴史的にトレースし、そして最後には、異なる言説間の差異に充ちた関係性のなかから、細菌の実在の客観性(自然)そのものを標榜して、人間の想像的表象の可能性を無効にし、差異を客観性の名の下になし崩し的に均していってしまう「科学史」が誕生してくることを描き出そうとするものである。

本論はそのため、まず序章で、上記のような論文の目的を、今日の科学史・科学論の議論のなかに位置づけつつ呈示したあと、二部構成をとる本編の第一部では、「細菌学」の「前史」として16世紀の医師ジローラモ・フラカストロと17世紀の科学愛好家アントニー・ファン・レーウェンフック、第二部では、細菌学確立の立役者として化学者ルイ・パストゥールと医学者ローベルト・コッホの、それぞれの人物像と科学的業績の両面を詳細に論じてゆく。

第1章では、「病原性微生物理論の父」として20世紀初頭に「再発見」された16世紀の医師ジローラモ・フラカストロが提唱した、「感覚できない極小の粒子」と「伝染する病気のたね」という二つの概念を検証し、顕微鏡が発明される直前の時代を生きたフラカストロが、「不可視」という条件の下で、ルネサンス末期の様々な哲学的言説を調停しながら到達した「病気のたね」という考え方が、現代的な「細菌」とこれほどの親近性を示すことになったのはいったい何故なのかという問題を検討した。

第2章では、「微生物学の父」として、やはり20世紀初頭に「再発見」されたアントニー・ファン・レーウェンフックの観察と言葉に注目し、フラカストロとは逆に、「視界」だけがあり、そこでの表象を説明するための言語をいっさい持たなかったレーウェンフックの観察が「科学」になるためには、まず19世紀末における「微生物学の誕生」を待たなくてはならなかったという、典型的な科学史記述の「遡及性」という問題を確認する。

第3章は、本論における最も重要な分析対象である「微生物学の父」ルイ・パストゥ

ールが、今日的な視点から見れば一見理解しがたいような研究領域の横断を繰り返しながら、極めて独自の「パストゥールの科学」と呼ばれるものを築き上げた研究の道程を辿り、その発酵研究・医学研究の中核を成した「胚種理論」の「胚種」という概念が、厳密には「細菌」とはちがう非常に特殊な構想であったことを示す。

第4章は本論の辿る「『病原菌』の歴史」の終着点であり、「パストゥールの科学」を否定して、病原性の細菌、すなわち「病原菌」という観念を精密な技術と方法論によって証明してみせたローベルト・コッホの仕事を概観する。コッホこそは、標本作成技術や顕微鏡操作、そして何より顕微鏡写真技術の改良と、観察の際に守られねばならない「コッホの条件」という方法論的規定によって、コッホ以降の細菌学研究の均質性を保証し、この方法のもとで統一されていく「微生物学／細菌学」を全世界に普及させた立役者であった。

最後に、結論部において田中氏は、このようにして書かれた「病原菌の歴史」が、現代における歴史記述の客観的根拠としてあとから見いだされた「細菌」という「事物」と、そこに至るまでに個々の研究者によって積み重ねられた様々な「事物の表象」との「ずれ」・「偏差」に着目し、そこにおける「人間的なるもの」の存在につねに注目し続けることによって、ともすれば強圧的に現代から遡及してすべての過去の差異を一元化してしまおうとする科学史の言説に、別の可能性を突きつけるものだという点を強調している。

本論文は表象文化論の方法論を用いて、「病原菌」の歴史という自然科学的題材に取り組むものであるが、その問題設定の「学際性」のために、常に言説の根拠を問うようなメタ言語を模索する必要があった。そのような記述上の困難な課題に取り組みながら、他方ではまた、本論文の議論はフラカストロ、レーウェンフック、パストゥール、コッホそれぞれの手になる一次資料をこれまでに例のないほど詳細かつ丹念に読み込むという文献学的手続きにも基づいている。こうした文献学的な努力によって、彼らの言説を、その認識論的技術と方法論にしっかりと立脚させ、それを批判的に記述・検討しえたことは、この論文が、近年盛んになりつつある「科学における表象」に着目した科学論の一端を担い、そこから科学史のみならず、そもそも歴史記述というものが何であり、何であらねばならないかというアポリアに一石を投じるような独創性を持ちえていることの十分な根拠になっている。

審査員からは、時系列的な記述の体裁をとったため、結局コッホの細菌学を最終の到着点とするような歴史記述になっていて、フラカストロやレーウェンフックの言葉、スケッチなどにみられる非科学史的表象のユニークさが十分に前面に押し立てられなかったうらみがあるなどの、批判的な指摘もあったが、それらは本論文の学術的価値を損なうような欠点ではないという点で、審査員全員の意見が一致した。

以上を鑑み、本審査委員会は本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。